

SAVING
LIVES
CHANGING
LIVES



©WFP/Karel Prinsloo

日本と国連 WFP

飢餓から救う。未来を救う。





©WFP

干ばつの被災者に届けられる日本からの支援（アフガニスタン）



©WFP

5歳未満の子ども達への栄養支援に携わる日本人職員（イエメン）



©WFP

学校給食に活用される魚缶（ラオス）

世界の飢餓

国連WFPは飢餓をなくすことを使命とする
国連唯一の食料支援機関です

世界には、すべての人に十分な食べ物があります。
しかし、全人口の9人に1人、8億人を超える人々が、
飢餓に苦しんでいます。特に深刻なのは、子どもの
飢餓です。

世界の子どもの4人に1人は、慢性的に栄養が足りません。
5歳未満で亡くなる子どもの45%に、栄養不良が
関わっています。心身の発達が遅れ、生涯にわたって
ハンディを負う恐れもあります。

国際社会は、2030年までに飢餓をなくすという
目標を掲げています。

国連 WFP は飢餓をなくすことを使命とする国連
唯一の食料支援機関です。毎年約80カ国、9000
万人に対して、紛争や自然災害などの緊急時に命を
救うための食料支援を届けるとともに、将来にわた
って持続的に発展していくための強い地域社会
の構築に取り組んでいます。



©WFP/Saikat Mojunder

国連WFPの活動



緊急食料支援



母子栄養



学校給食



自立支援



小規模農家支援

国連WFPは、SDGsの目標2の達成を目指しています

「持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals)」は、「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」「質の高い教育をみんなに」など、2030年までに達成すべき17の国際社会の共通目標をまとめたものです。国連WFPは、目標2「飢餓をゼロに」が他の目標達成の基盤にもなるとの考えのもと、パートナーシップを通じてその実現を目指しています。



小規模農家支援

©WFP/Badre Bhaji



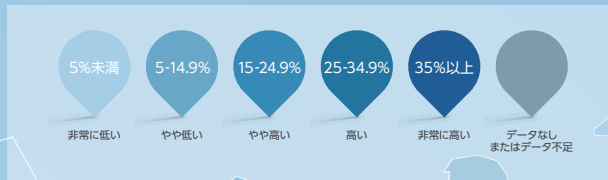
自立支援

©WFP/Rein Skullerud





日本からの食料支援を手にする子ども（ミャンマー）



重点分野



災害に強い地域社会の構築(レジリエンス)



ジェンダーの平等



気候変動への対応



イノベーション



人道と開発と平和の連携(NEXUS)

リーダーとしての役割



食料の安全保障
クラスター



緊急通信クラスター



ロジスティクス
クラスター



国連人道支援航空
サービス(UNHAS)



国連人道支援物資
備蓄庫(UNHRD)

国連WFPが運営するグローバルな輸送網

ジェンダー

©WFP/Giulio dAdamo



緊急通信クラスター

©WFP/Rob Buurveld



UNHAS

©WFP/Gabriela Vivacqua



日本と国連 WFP 2

日本政府が支援した国 (2013 - 2018)

日本は国連 WFP にとって最も重要な拠出国のひとつです

国連WFPに日本政府から約1億3000万米ドル(約142億円)、国連WFP協会を通して民間から約1200万米ドル(約13億円)、計1億4200万米ドル(約155億円)が寄せられました。(2018年)

国連WFPは設立以来、人道支援と経済社会開発の両方を任務としています。日本政府と協働し、飢餓の原因となっている課題解決のために「人道と開発と平和の連携(NEXUS)」の推進に力を入れています。国連WFPの活動は、世界の「食料安全保障」の実現、ひいては国際社会の安定に寄与するものです。

国際協力機構(JICA)や非政府組織(NGO)、日本企業などのパートナーとも、それぞれの強みを活かし、現地での活動や資金調達、広報活動など様々な分野で協力しています。



ガーナ

味の素株式会社が開発した栄養強化食品などと引き換え可能な食料引換券カードを配布。JICAの青年海外協力隊と連携し栄養や衛生環境の改善を目指す啓発活動を実施し、保健サービスの改善に貢献。



モザンビーク

日本植物燃料株式会社と連携し、スマートフォンアプリを活用した電子農協プラットフォームを立ち上げる。小規模農家が別の村や都市部の買い手と取引ができるようになり、市場へのアクセスを改善する。



シエラレオネ

日本からの支援で水田を整備。国際協力機構(JICA)と協力し、日本の水田灌漑設備技術や稲作普及技術を国連WFPの自立支援に活用。



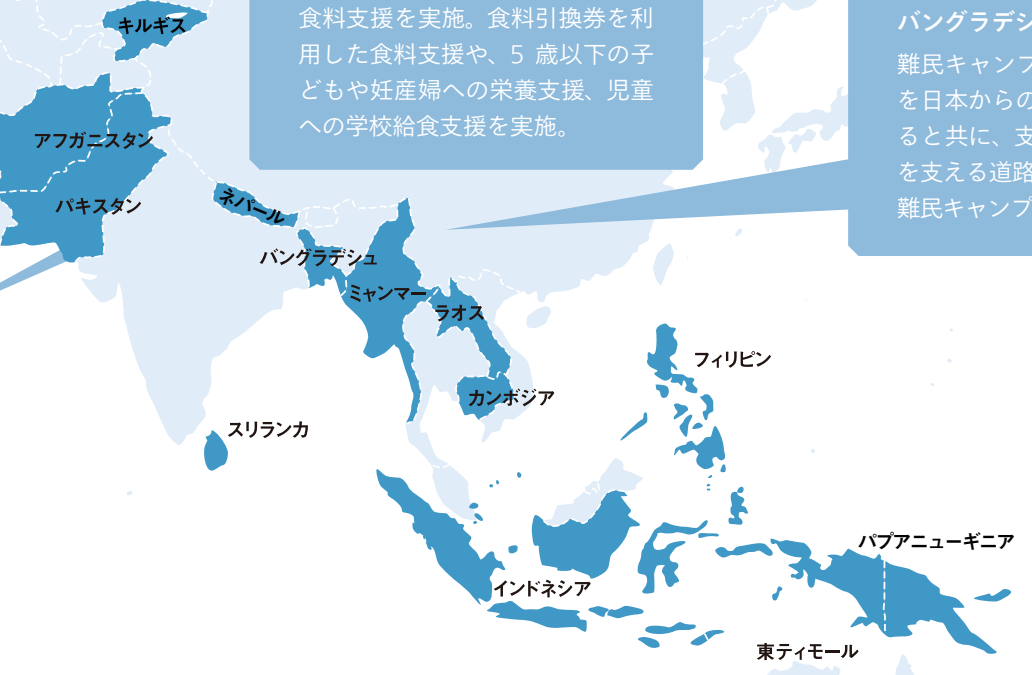
イエメン

紛争の影響を受けるイエメンの人々に、日本の支援によって緊急食料支援を実施。食料引換券を利用した食料支援や、5歳以下の子どもや妊産婦への栄養支援、児童への学校給食支援を実施。



バングラデシュ

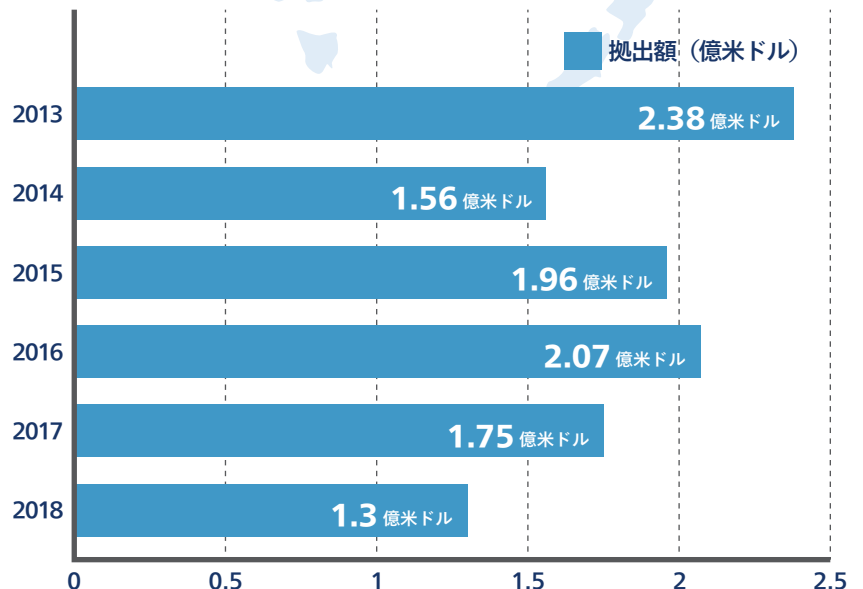
難民キャンプの人々への食料支援を日本からの支援によって実施すると共に、支援物資の円滑な輸送を支える道路等のインフラを整備。難民キャンプ内に橋を建設。



タンザニア

日本のスタートアップ企業である WASSHA 株式会社の製品と技術を活用し、無電化地域で女性の持続的な生計支援を行い、地方保健局と共に妊産婦の栄養改善を目指す啓発活動を実施。

日本政府から国連 WFP への拠出金の推移



国連WFPの活動

国連 WFP は様々な支援活動を行なっています



緊急食料支援

紛争や大きな自然災害が起きた時、まず必要とされるのが食料です。国連 WFP はいち早く被災した地域に入り、人々の命を救う食料を届けています。



自立支援

国連 WFP は、灌漑設備などのインフラ整備や、職業訓練の対価として食料等を支給しています。中長期的に、住民自身が災害に強い国づくりや、食料不足の解消に取り組むように促します。



災害に強い地域社会の構築

国連 WFP は各国政府に対し、自然災害や紛争などの危機に備え、災害後により良い社会を再建できる支援を行っています。国連 WFP の食料安全保障の分析や、社会保障システムに関する専門的知見を活用しています。受益者自らが貯水池や灌漑設備などインフラ整備に従事し、食料の供給体制を長期的に強化することで持続的な地域の開発に貢献しています。



学校給食支援

学校給食支援は子どもの栄養状態を改善し、勉強への集中力を高めます。男女格差の大きい地域では、一定の出席率を満たした女子に持ち帰り用の食料を配るなど、女子の就学も促します。また、地元の小規模農家から食材を調達して地域経済の活性化を狙うなど、地産地消の学校給食支援も強化しています。



母子栄養支援

胎児から2歳までに十分な栄養を摂れないと身体や脳の発達が遅れ、その影響は生涯にわたる恐れもあります。国連 WFP は妊産婦や乳幼児、またHIVや結核感染者などに対して栄養が強化された食料を支給しているほか、母親らに栄養や感染症予防などの知識を教える講座を開いています。



©WFP/Katusca Gonzalez 1

©WFP/Gabriela Vivacqua 2

©WFP/Nina Schroeder 3 4

©WFP/Nina Schroeder 5

1 ドローン: 災害時に上空から画像データを取得・解析することによって的確で迅速な支援活動を可能にする。2 SCOPE CODA: モバイルデバイスと個人カードでヘルスケアサービスの受診歴を記録。データのデジタル化によって子どもや妊産婦の栄養管理に貢献している。3 4 ハイドロポニク: 砂漠地帯における水耕栽培事業。太陽発電を利用したコンテナ内で家畜の餌となる草を育てる。5 ブロックチェーン技術をヨルダンのシリア難民キャンプでの食料支援に活用。銀行を介さずに食料の購入のための現金を受益者に支給。

イノベーション・アクセレーター

国連 WFP はドイツ・ミュンヘンに「Innovation Accelerator (イノベーション・アクセレーター)」をインキュベーションオフィスとして設立。SDG2「飢餓をゼロに」の達成を目指し、革新的なアイデアをもって人道・開発支援の現場の課題を解決するプロジェクトを生み出しています。日本の民間企業の技術や専門性を、国連 WFP の人道・開発支援の現場に活用していくために連携を進めています。

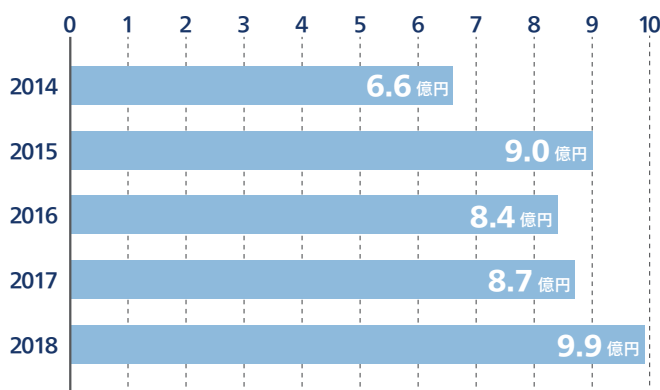


©WFP/Shaza Moghraby

国連WFPの民間連携

民間との先進的な取り組みが効果をあげています

国連 WFP 協会から国連 WFP 本部への寄付金額



国連 WFP への日本の民間からの公式支援窓口となっているのが特定非営利活動法人 国際連合世界食糧計画 WFP 協会 (国連 WFP 協会) です。国連 WFP 協会は民間への募金活動や、企業・団体との協力関係の構築、広報を通して国連 WFP の活動を支援しています。国連 WFP 協会は 1999 年に設立、2006 年から「認定 NPO 法人」に認定されています。



WFPウォーク・ザ・ワールド

チャリティーウォーク「WFPウォーク・ザ・ワールド」を開催。参加費の一部が寄付となり、国連 WFP の学校給食プログラムに活用されています。

WFPエッセイコンテスト

毎年小学 4 年生以上から「食」や「飢餓」にまつわるテーマでエッセイを募集。応募数によって寄付協力企業から学校給食プログラムに寄付されます。

国連WFPを応援する著名人

知花くららさん

国連 WFP 日本親善大使

©WFP/Kasane Nogawa

EXILE ÜSAさん

国連 WFP サポーター

©WFP/Kensuke flori



レッドカップキャンペーン



給食を入れる容器として使っている「赤いカップ」を目印に、企業が寄付付き商品を展開し、売上の一部を国連 WFP の学校給食支援に寄付する取組みです。



ルワンダ

©ACジャパン



©WFP/Mayumi Rui

国連WFPの支援の成果

「給食のおかげで卒業できた」 ルワンダの学校給食支援

上左の写真は2009年にルワンダのビハラグ小学校で国連WFPによる学校給食支援の公共広告用に撮影。タイトルは「hopeを消さないで」。「o」は給食の入った赤いカップ。左から2人目のクラリスさんと3人目のジャン・クラウドさんと10年を経て再会し、同じ場所と構図で上右の写真を2019年に撮影。小学生から高校3年生になったクラリスさんは「給食のおかげで卒業し、ここまで成長できた」と話してくれました。学校給食支援は

子ども達の栄養改善と教育向上に貢献しています。

シエラレオネの自立支援

日本からの支援によりシエラレオネの農村の持続的な米の生産を支援しています。使われていない沼地（右上写真）を開墾し、水田を整備（右下写真）することでより広大な農地を耕作できるようにしています。国連WFPは、農家が水田を整備する労働の対価として食料支援を行い、持続的な地域農業を後押ししています。



シエラレオネ

日本の非政府組織(NGO)とのパートナーシップ

国連WFPとの連携により大きな成果をあげています - プラン・インターナショナル・ジャパン

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパンは、国連WFPと連携して、2013年から「学校給食と子どもの栄養改善」プロジェクトをカンボジアで実施しています。約14万人の子どもの栄養改善を目指し、学校給食や学校菜園の導入、経済的に困窮した家庭への食料支援、栄養指導などに取り組んできました。

“娘に自立した女性に なってもらいたい”



©プラン・インターナショナル

ソッカさんと母親
プロジェクトに参加する13歳のソッカさんは、学校給食とともに家庭への食料配給の支援を受けています。「お母さんはお米と野菜の美味しいご飯を作ってくれます。時々、魚も食べます。

学校の給食も大好きです」と言います。ソッカさんの母親も「この支援がなかったら、娘を学校に通わせることはできず、働きに出すところでした。読み書きのできない私にとって、娘の教育は何より大切です。娘には知識や技術を身につけ、自立した女性になってもらいたいです」と語りました。

給食が学校に通い続ける力に

このプロジェクトは草の根で長期的な地域開発を行うプラン・インターナショナルの強みと、国際社会からの資金調達力や栄養に関する知識が豊富な国連WFPの連携により、大きな成果を上げています。活動を通じて、多くの子どもたちが登校して朝食をとり、元気に学び、卒業まで学校に通い続けられるようになりました。対象校の多くでは、給食に使う野菜を学校菜園で育てたり、調理係や食材管理係への報酬などに必要な資金調達を住民や学校が自ら担うことで、持続可能な体制づくりも進んでいます。

多方面に波及する成果

私は学校給食の導入、実施の現場に立ち会い、給食を食べて笑顔で学ぶ子どもたちや、それを喜ぶ親や教師たちにお会いしてきました。学校給食がもたらす成果は子どもの栄養状態の改善にとどまりません。学校の出席率、修了率が上がる他、給食に必要な給水設備や衛生設備を整えることで、感染症が減りました。給食を持続させるため、親たちは協力して食材や労働力を提供するようになります。こうした多方面に波及する成果を目の当たりにして、学校給食という支援の形がとても有効であると実感しました。（公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン 山形文）



プラン・インターナショナル



子どもの権利を推進し、貧困や差別のない社会を実現するために世界70カ国以上で活動する国際NGOです。創立1937年以来、子どもや若者、地域の人々とともに地域開発を進めてきました。

世界各地で活躍する 国連WFP日本人職員

命をつなぐだけでなく、 希望もつなぐ支援

国連 WFP に入社してからタンザニア、チャド、パキスタン、ローマ本部を経て、現在はシリア事務所でサプライチェーンを担当しています。WFP の食料支援、特に緊急支援のバックボーンとして、サプライチェーンは欠かせません。シリアでは主に国内での物流を担当していますが、とにかく物資を必要なところへ、支援を必要としている人々の元まで届ける。輸送方法は国により、場所により、状況により様々ですが、目標は常にシンプルです。明日の学校給食がきちんと提供されるように、子ども

たちの栄養状況が少しでも改善するように、避難民の人達が少しでも美味しいものを食べられるように、おなかを空かせている人が少しでも減るように、と願って働いています。避難していた人々がシリアに戻りつつありますが、住居やインフラは破壊されたままです。郊外の村々では人道支援が無ければ日常生活を送ることも難しいです。支援はやはり命をつなぐだけでなく希望もつなぐものです。

シリア北部の都市アレッポは、かつては商業、工業で栄えた大きな都市ですが、美しかったであろう旧市街は無残に破壊されてしまいました。それでも、少しずつ明かりが点り、新しいレストランやカフェがオープンし、街に活気が戻っています。とはいえ、たまに聞こえる爆撃音で、まだまだ紛争は完全には終わっていないんだ、と思い知らされます。

瓦礫の山と化した街

暗い街で、遠くまでが見渡せるようになってしまった旧市街の瓦礫の山を見たときには、津波の後の街を思い出しました。私は東日本大震災支援が始まって3カ月後に東北地方で活動していたのですが、被災地の静まり返った街を歩いた時のように、アレッポを歩いていると、昔は人で賑わっていたであろう旧市街の



国連WFPシリア事務所職員
石井理江

©WFP

国連WFPが支援するパン工場(シリア・アレッポ) スーク(市場)のがれきの中で、あまりにも多くのものが失われてしまったのではないかと、立ち尽くしてしまっています。そんな私にシリア人のスタッフは、「やっと終わった、これからだ」と笑いかけてくれました。

シリアの経済状況は決して良くなったとは言えません。それでも「これからだ」と前に進もうとするシリアという国の支援を必要とする人たちや地域社会が、前よりもさらに良く立ち直っていくためのお手伝いができることに大きなやりがいを感じています。



国連WFPの食料支援を準備する地元で雇用されたスタッフ



国連WFPの支援トラックに食料支援の小麦粉を積み込む



©WFP/Marwa Awad

瓦礫の中を学校に通う子ども達(シリア・アレッポ)

東日本大震災や熊本地震における物資輸送支援

2011年の東日本大震災で、国連WFPは日本政府から救援物資輸送の分野を中心とする支援要請を受け、震災発生後ただちに支援活動を立ち上げました。

国連WFPは各国政府や国際機関からの救援物資(飲料水、毛布、缶詰、子ども服など)900トンを被災地に輸送したほか、日本の企業から寄せられた食品・飲料62万点をとりまとめ、

被災地に届けました。救援物資を一時保管するための大型テント45張と事務作業等を行うプレハブ事務所36棟を被災地に建設し、物流拠点を設置しました。支援活動のため、世界各地の国連WFP事務所から日本人15名を含む職員27名が来日し、被災地で活動しました。この知見は熊本地震でも活かされました。



ボランティアセンターとして利用された国連WFPの大型テント(宮城県南三陸町)



WFP国連世界食糧計画 日本事務所

<https://ja.wfp.org>